

脱炭素だけではない、欧州のGX

今回の研修では、欧州のエネルギー政策についても説明を受けました。

これまで欧州では、地球温暖化対策として「脱炭素」が強力に進められてきました。

しかし、ロシアのウクライナ侵攻によるエネルギー危機などを受け、その考え方は大きく変化しています。

現在は脱炭素だけでなく、エネルギー安全保障、産業競争力、経済安全保障を合わせて考える方向に政策の重点が広がっています。

その背景にあるのが「戦略的自律性」という考え方です。

他国への過度な依存を避け、自分たちでエネルギーや産業を支えられる力を持つこと。その重要性が欧州で強く意識されています。

原子力と再生可能エネルギーを組み合わせるフランス

フランスでは原子力発電をエネルギー政策の中核とし、発電量の

約6〜7割を原子力が占めています。

その一方で水力、太陽光、風力などの再生可能エネルギーも着実に拡大しています。さらに、水素を重要エネルギーと位置付け、省エネと組み合わせながら、安定供給と脱炭素の両立を進めています。

調査では、日本の農村部についても、小水力、木質バイオマス、バイオガスなど、地域資源を活用したエネルギーには大きな可能性があるとの意見が示されました。エネルギーを「使う」だけではなく、地域にある資源から「生み出す」。

このことが地域振興や産業づくりにもつながるという視点は、自然資源に恵まれた町村にとって重要なテーマです。

人口503人の「美しい村」へ

調査団が訪れたラ・ロッシュ・ギュイヨン村は、パリから約70キロ離れた場所にある、人口503人の小さな自治体です。

歴史ある城や教会、美しい景観を持ち、「フランスの最も美しい

村」の一つにも選ばれています。

年間約9万人もの観光客が訪れる一方、村役場職員はわずか6人。歴史的な景観を守るための維持管理、観光客による交通や駐車、ごみへの対応、住民への行政サービスなど、小さな自治体ならではの多くの課題を抱えています。

そして、村ですべてを行っているわけではありません。

教育、福祉、文化財、観光、環境保全などについては、国や県、広域行政組織、財団、企業、地域団体などと連携し、それぞれが役割を分担しています。

例えば、人口の少ない地域では学校をすべて単独で維持するのではなく、小学校はA村、高校はB町など、周辺の自治体間で役割を分担し、子どもたちはスクールバスなどで通学しています。

「人口を増やす」だけではない

EUの農村政策で、もう一つ印象的だった考え方があります。

それは、「すべての農村で人口を増やすことを目指すわけではない」というものです。

ギーなど、都市の暮らしを支える多くのものが生み出されています。

フランスの農村政策でも、条件の厳しい地域について、「効率が低いからなくしてしまう」のではなく、国土管理、農地保全、景観災害防止、地域社会を維持する役割までを含めて評価し、支援するという考え方が示されていました。

白糠だからできること

白糠町もまた、農業、酪農、漁業をはじめとする第一次産業の町です。

豊かな自然の中で食料を生み出し、地域の資源や文化を生かしながら、人々が暮らしています。

もちろん、EUやフランスと日本では、国の制度も地域を取り巻く環境も異なります。そのため、現地で見た仕組みをそのまま白糠へ持ち込めるわけではありません。それでも、食料を生み出す地域をどう守るのか。

人口が減っても安心して暮らせる地域をどうつくるのか。地域にある資源を次の世代へどうつないで行くのか。

人口が減っても、医療、教育、交通、通信、生活サービス、雇用などを確保し、住民が望めば地域に住み続けられる環境を守る。

人口減少を前提としながらも、人口が少ないという理由だけでサービスが失われ、結果として暮らせない地域にしてはならないという考え方です。

「農業+α」で地域とつながる

最後に訪れたのは、パリ近郊サン・ドニ市にある都市型農園「ギャラリー農場」です。

面積は約2ヘクタール。野菜を生産し、併設する直売店や地域の店舗で販売しています。

しかし、この農場の仕事は、野菜を作って売ることだけではありません。

直売店の運営、来訪者への対応、子ども向けの教育プログラム、農業体験、企業などから請け負う緑地管理、施設の貸し出しなど、複数の仕事を組み合わせています。

農場では有機農業に取り組むほか、温室では自動かん水などの技術も活用しています。

共通していたのは「地域を残す」という視点

農業、食料、エネルギー、人口減少、小規模自治体――。

一見すると別々のテーマですが、今回の調査を通して、それぞれに共通する考え方が見えてきました。それは、効率性だけで地域の価値を測らないことです。

農地には、食料を生産するだけではなく、国土や景観を守る役割があります。

地域に住む人がいることで、文化や歴史、コミュニティが受け継がれて行きます。そして農村では、食料やエネルギー

こうした問いは、白糠町にも共通しています。

今回の調査で改めて感じたのは、食料やエネルギーを生み出す地方の重要性です。

人口が少ないから、効率が悪いからという理由だけで地域の価値を判断するのではなく、そこに人が暮らし、文化があり、産業があり、食料やエネルギーを生み出していること自体に非常に大きな意味があります。

欧州で見聞きしたさまざまな取組を一つの参考としながら、白糠の資源や強みを改めて見つめ直し、これからのまちづくりに生かしていきます。



右／「フランスの最も美しい村」の一つに選ばれているラ・ロッシュ・ギュイヨン村。写真上部の城には第二次大戦中、ドイツ軍のロンメル将軍の司令部が置かれた 中央／在フランス日本大使館で行われた農業・食料主権省との意見交換 左／ギャラリー農場の家畜。フランスでは鉄道敷地や公園、傾斜地などの除草にヤギを活用する事例があるとのこと